

第一章

序論

A. 問題の背景

スピーチというのは、多くの人前で言葉により考えを表現するものである(教育文化局、2008：1071)。スピーチはマスコミとして、聞き手にメッセージと特別な目的を伝える。スピーチで何かすばらしいことをすることができる。

実際には、スピーチはコミュニケーションの一つとしてほしい人間が怖くなると言われている。しかし、スピーチは今でも、将来でもとても必要なことだと思う。リーダー、専門家、教師、学生などのそのコミュニケーションスキルが必要である。いつか直接で責任を取られているスピーチ (*impromptu*)、原稿スピーチ (*manuscript*)、記憶スピーチ (*memorized*)、アウトラインスピーチ (*extemporaneous*) などのチャンスがある (イブラヒム、2009: 98-99)。

スピーチは外国語の学習者にあまり教えられないということである。学生は学者として知識階級にし、キャンパスの活動、社会的、国、世界を改造し、重要な役割を握る。将来は若者と学者に生活を改善させることができる。

スピーチの関係がある日本語の学習者で、本研究を行われている。本研究はASEAN 日本語スピーチ・コンテスト優秀者発表会と中央アジア日

本語弁論大会原稿集の原稿における内容と形とレトリックの分析を行われている。

スピーチコンテストに参加する前には日本語のスピーチの原稿を書くのは合格しなければならいである。だからスピーチの原稿の準備が必要である。スピーチの原稿を書くによっては、聞き手に言語とメッセージを良く伝えることができる。言語の中でスピーチの原稿を書くというのは自分の意見を書き言葉にし、発表することである。

コンテストに参加する学生と機関が有益が得る。その有益というのは、例えば、日本語のスピーチのコンペティション経験を得り、日本語の自信がついて、得意になり (*good will*)、褒美 (*reward*) にももらい、無料で日本へ行くことができる。そんないろいろな有益に見ると日本語の学習者の動機をつけ、積極的な影響も得ることができる。

そのいろいろな有益なので、日本語の学習者がスピーチコンテストに参加するため、日本語の能力も向上することができる。ところが学生は日本語のスピーチの授業があまり調べるから注目の的にならなくて、参考書も多くない。実はいつか日本語学習者は日本インドネシア代表として公式と非公式の協力関係を結ぶことができる。そして日本は世界で先進国として、大事な影響がある。それでマスコミを調べるのが必要だと思う。

本研究はあまり多くないと思い、それにたいして日本語能力とスピーチコンテストに参加したい学習者のため、筆者は将来、それらも社会的に効果的なコミュニケーションをするためである。

本研究は ASEAN 日本語スピーチ・コンテスト優秀者発表会と中央アジア日本語弁論大会原稿集の原稿における使った内容と形とレトリックの分析の研究を行われる。そんなに分析を調べ、日本語の学習者の興味とモチベーションと日本語スピーチの能力を向上するため、研究を行われている。

スピーチは、修辞法のプロセスの一つである。互いにスピーチの関連し合わせ、効果的な目的でよくレトリックを使う。レトリック分析が大切だと思い、話し言葉でも書き言葉でも上手に使ったプロセスがある。レトリックがぴったり合わないと、メッセージが伝えなく、逆に誤解が生じるもできる。いろいろな誤解を避けるため、効果的なレトリックを調べるのが必要だと思う。Webster Tower Dictionaryによると、修辞学は芸術として言葉を効果的に用いるものである。(スハンダング、2009 : 25-26)。そしてリベッキとリベッキは真実を論理的に見せるという機能もある(マアリフ、2010 : 117)

レトリックはリーダーや著名な人、教育の中でよく使っている概念である。例えば、教育で、教師と学生のためとても便利だと思う。教師は学生にどうやって学生の疑問を効果的に答えられるか、一方、学生もよく学術上の話すスキルをよく使われるか。そこで、授業のなかで疑問を投げかけ、情報または意思を明らかにする学術的プレゼンテーションなどの便利な必要がある。それでレトリック学科を調べるのが普通の問題である。

B. 問題の設定及び範囲

1. 問題の設定

研究設定上の問題の背景に基づいて、本研究の問題を以下のように認定する。

1. 日本語スピーチコンテストの原稿における内容はどう表せるのか。
2. 日本語スピーチコンテストの原稿における形はどう表せるのか。
3. 日本語のスピーチコンテストの原稿におけるレトリックはどう表せるのか。

2. 問題の範囲

本研究の問題の範囲は次のような認定する。

1. 日本語スピーチコンテストの原稿における内容はトピック（そのうえタイトル、一般的な目的、特別な目的、スピーチのタイプ、スピーチの構成）を制限する。
2. 日本語スピーチコンテストの原稿における形はジャンル分析とそのジャンルによって分析を制限する。
3. 日本語スピーチコンテストの原稿におけるレトリックはどのようなコミュニケーションを伝え（言語の特徴、聴衆に対する視点、コミュニケーションのメッセージ、コミュニケーションの方法、コミュニケーションのモデル、アリストテレスの理論）を制限する。

C. 研究の目的及び意義

1. 研究の目的

本研究は日本語の学習者に特にスピーチコンテストに参加する学習者は日本語スピーチコンテストの原稿の知識と日本語のモチベーションを上げ、参考になると思う。一般的には、効果的なコミュニケーションを期待される。

本研究は一般的に、研究課題を答える。そこで、本研究の目的は次の通りに述べる。

1. 日本語スピーチコンテストの原稿における内容を明らかにする。
2. 日本語スピーチコンテストの原稿における形を明らかにする。
3. 日本語スピーチコンテストの原稿におけるレトリックを明らかにする。

2. 研究の意義

本研究の意義は、以下のように記述する。

1. 理論的な意義

データ分析結果から日本語のスピーチの原稿における理論を開発する。それで選択参考と日本語の学習者の動機をづける。特に将来日本語の学習者が他のスピーチコンテストの能力を期待される。

2. 実用的な意義

- 日本語のスピーチの能力をスキルアップためである。

- 知識的とプロフェッショナルコミュニケーションの能力をスキルアップためである。
- 自分自信と社会的にコミュニケーションの能力をスキルアップためである。
- コミュニケーション活動で自分自信の能力をスキルアップためである。
- パーソナリティと社会道徳を開発する。

D. 用語の説明及び定義

本研究の同様の観点を分かるため、次のような用語の説明及び定義を記述する。

1. 本研究の日本語スピーチコンテストの原稿における内容はトピックである。トピックの中にはタイトル、一般的な目的、特別な目的、スピーチの形、スピーチの構成である。
トピックは最近関心している話、テキストにある対象に関わる議論、講義、作文などの主題となっているものである(教育文化局、2008 : 1481)。
2. 本研究の日本語スピーチコンテストの原稿におけるト形はジャンル分析である。そのジャンル分析は叙述文と論争文とエクスポ文と描写文である。

- ・アルワシラー(2007 : 119)によると、「*narration*」は「*to narrate*」から生まれた言葉であり、「物語る」という意味である。叙述は、読者に起こった物事を明確に記述するというような文章の分類である。叙述は、記述と結合することが多くあり、解説又は説得として機能がある。
 - ・アルワシラー(2007 : 117-118)によると、論争はそのステートメントが事実であるか事実ではないかということを証明する作文のことである。
 - ・アルワシラー(2007 : 111)によると、エクスポはある問題を明らかにし、説明し、教育し、または評価し、読者に情報とヒントを与える。
 - ・アルワシラー(2007 : 114)によると、描写は描写しようとするものの人間、対象、姿、景色、または事件である。描写は他のストラテジーとコンビネーションされることができ、とくに叙述である。描写は二つであり、それは論理的な描写と印象的な描写である。
3. 本研究の日本語スピーチコンテストの原稿におけるトレトリックは言語の特徴、聴衆に対する視点、コミュニケーションの方法、コミュニケーションのモデル、アリストテレスの理論 である(マアリフ、2010 : 80-82, 117-118)。

*Webster Tower Dictionary*によると、修辞学は芸術として言葉を効果的に用いるものである。(スハンダング、2009 : 25-26)。そしてリベッキとリベッキは真実を論理的に見せるという機能もある(マア

リフ、2010 : 117)。それからアリストテレスは趣のある面で三つある。それはエトスは個人的の高級を開発し、道徳的なアピールである。ロゴスは現実または論証で論理的なアピールである。パトスは指導し、ある感情的なアピールである（マアリフ、2010: 117-118）。

4. 本研究日本語スピーチコンテストの原稿は以下のように記述する。

- 第 21 回 ASEAN 日本語スピーチ・コンテスト優秀者発表会で発表した『グローバル経営 2007 年 1 月号』である。

- 第 25 回 ASEAN 日本語スピーチ・コンテスト優秀者発表会で発表した『グローバル経営 2011 年 1/2 月合併号』である。

- 第 10 回中央アジア日本語弁論大会原稿集、2006 年 4 月 15 日ウズベキスタンである。

5. 文章は、小説、本、記事、スピーチ、講義のような完全な作文あるいはレポートに表現させる統一の言葉である（教育文化局、2008 : 1552）。要するに、ルルは文章というのは、公衆に意見を述べる方法であり、幅広くある解釈を引かせる（ソブル、2006 : 11）。

E. 研究の方法

1. 研究のデザイン

本研究のデザインはクアリタティブで行われている。データは帰納的に調べる。帰納的というのは現実データから分析し、理論を作る（ジャジャスダルマ、2006: 14）。

本研究には日本語スピーチコンテストの原稿で内容と形とレトリックの分析を記述する。

2. 研究の方法

本研究の方法はデスクリティブ法で使われる。デスクリティブ法では研究の中心点を確認し、記述する。そこで集まったデータを専攻し、グループに分け、分析し、解釈し、結論する。そして結果を記述する。

本研究は日本語スピーチコンテストの原稿で内容と形とレトリックを行われ、解釈し、結論を記述する。

3. 研究のデータ及びサンプル

本研究のデータ及びサンプルは以下のように記述する。

- 第 21 回 ASEAN 日本語スピーチ・コンテスト優秀者発表会で発表した『グローバル経営 2007 年 1 月号』（一つである）。
- 第 25 回 ASEAN 日本語スピーチ・コンテスト優秀者発表会で発表した『グローバル経営 2011 年 1/2 月合併号』（一つである）。
- 第 10 回中央アジア日本語弁論大会原稿集、2006 年 4 月 15 日ウズベキスタン（二つである）。

全部のデータは四つで使う。

研究のサンプルは *purposive sampling convenience* テクニックで、データ選択の合計は容易であるため時間と所と基金と力の制限があるから使う(アルワシラー, 2003: 72)。

本研究は日本語スピーチコンテストの原稿の選び方はそのトピックとジャンル分析のバリエーションで原稿の選び方はそのポイントに見られ、研究結果のバリエーションもある。

4. データの収集技法

研究のデータの収集技法はドキュメンテーションテクニックで使う。ドキュメンテーションテクニックというのはデータ収集は非人間から得る(シャムスディン & ビスマイアダマヤンティ, 2007: 108)。

ASEAN スピーチの原稿は *The Japan Foundation* ジャカルタから文献法で使用し、*Central ASIA* スピーチの原稿は日本人または *native speaker* 取られたメールである。

本研究のデータは推察法で行われている。筆者は日本語スピーチコンテストの原稿に使った内容と形とレトリックを調べる。

5. データの分析方法

本研究のデータの分析方法はデスクリティブクアリティタイプで行われている。それは組織し、分析し、解釈し、分析したデータから特別な発見と一般的な発見をする。

次のようなデータ分析方法を記述する。

- a. 研究の問題を選択し、確認し、日本語スピーチコンテストの原稿を洋細に読んでいる(*close reading*)。
- b. 確認しやすいため、パラグラフの番号と文章の番号のスピーチの原稿を付く(*display*)。

c. デスクリティブの分析をする。

(1) スピーチの原稿の内容はトピックを確認する。そのうえタイトル、一般的なスピーチの目的、特別なスピーチの目的、スピーチのタイプ、スピーチの構造を確認する。

(2) スピーチの原稿の形はジャンル分析、ジャンルによって分析する。

(3) スピーチの原稿のレトリックを確認する。それは言語の特徴、聴衆に対する視点、コミュニケーションの方法、コミュニケーションのモデル、アリストテレスの理論である。

d. その分析したデータから解釈をする。

e. 結論を作る。

F. 論文の構成

第一章序論。

本章の中には問題の背景、問題の設定および範囲、研究の目的と研究の意義を説明する。

第二章基本的理論。

本章の中には主要理論とサポーター理論を説明する。それはスピーチ、四の主題、スピーチの原稿を書く、自己計画（スピーチ）、スピーチのタイプ、スピーチの構造、スピーチの始め方、魅力的なス

スピーチにするために、文章のタイプ、レトリック、レトリックの歴史、日本語感情表現の手引きである (*affective expression in Japanese*)。

第三章研究の方法。

本章の中には研究方法が詳しい説明する研究のデザイン、研究の方法、研究のデータ及びサンプル、データの収集技法、データの分析方法である。

第四章データの分析。

本章の中には第一、二、三、四のスピーチの原稿を分析する。

第五章結論及び今後の課題。

本章の中には結論と今後の課題である。